



神戸三田キャンパス

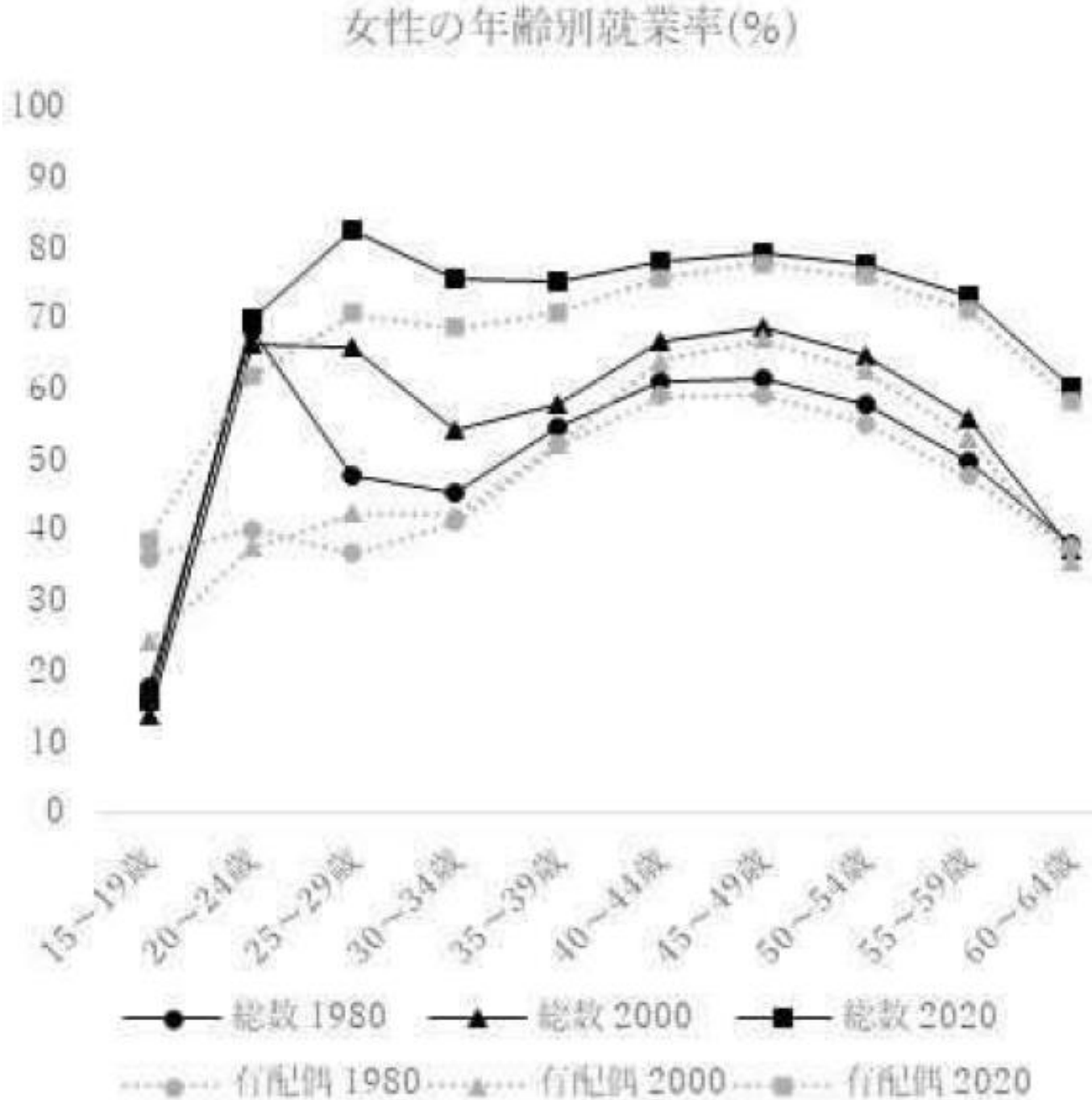
総合政策学部 四方理人准教授



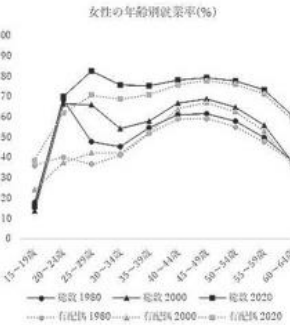
近年、日本の女性の働き方は大きく変わりました。図は、横軸に年齢、縦軸に女性の就労率をとったものです。黒い実線から分かるように、1980年における女性の就労率はA代前半で最も高く、B代後半に低下し、C代で再び上昇したのちにD代後半以降に低下していった。

これは「M字カーブ」と呼ばれ、結婚・出産で仕事をやめ、子育てが一段落した後にパートなどの非正規雇用で再就職する働き方の特徴を端的に示しています。しかしながら、2000年にはE代後半、20年ではF代の就労率が上昇し、「M字カーブ」は解消しつつあります。

「M字の底が上昇する理由は、



「国勢調査より筆者が作成した女性の就労率の変化



率の上昇の5〜11%しか説明できないことを明らかにしています。

では、なぜ女性の就労継続が増えたのでしょうか。残念ながらこの点については、今のところ労働経済学などの知見からは、十分な理由は示されていません。おそらく、人手不足が背景となり、多くの民間企業で働き方が見直され、これまで公務員や教員、看護師などでみられていた育児休業が取りやすくなり、残業の少ない働き方が増えてきたのだと思います。

そして、就労継続を行う女性が増えるとその行動が他の女性に影響し、加速度的に就労継続が増えるようになったのではないのでしょうか。これは、出生率の低下が経済的要因より言語的・文化的背景によって広がっていったとする人口学の伝播理論による説明といえます。今後は、このような女性の就業の変化が日本の所得格差にどのような影響を与えたかについて研究していきたいと考えています。

女性の働き方

主に三つ考えられることができます。

一つ目は、未婚化や少子化です。結婚・出産そのものが減少すると、子育てなどで仕事をやめる必要がなくなり、就労率は上昇します。

二つ目は、晩産化です。これまでG歳前後に集中していた出産が、H代後半やI代でも起こるようになると、出産での離職が減らなくなり「M字の底」は上昇します。三つ目は、結婚・出産での就労継続の増加です。これが、実質的な女性の就労の変化であるといえます。

図の灰色の点線は有配偶女性の年齢別就労率です。この点線の上昇が観察されるかどうかで、日本の女性の働き方が変わったかがわかります。1980年から2000年にかけては有配偶女性の就労

率の変化は小さいです。したがって、00年までの「M字の底」の上昇は、未婚化によって多くが説明されます。そして、J年からK年にかけては有配偶女性の就労率が大きく上昇しており、L年代以降に女性の働き方が大きく変わったといえます。

保育園の定員を増やすといった政府の両立支援政策が功を奏したことが理由でしょうか。私と同僚の西立野修平氏との共同研究では、保育所定員の拡充は00年から10年における子育て期の女性の就

2000年以降の変化大きく

前の記事の空欄A～Lを埋めながら、グラフを詳細に読み取りましょう。  
空欄には次の㉠～㉡のいずれかの数字が入ります。同じ数字を何度使ってもかまいません。記号で答えましょう。

㉠00   ㉡10   ㉢20   ㉣30   ㉤40   ㉥50   ㉦60   ㉧70

A		B		C		D	
E		F		G		H	
I		J		K		L	

## NIEワークシートのこたえ（2023年9月13日公開）

◆ワークシート「女性の働き方の変化(グラフの読み取り)」  
2023.9.12付 朝刊 わがまち三田阪神版 解答

A(ウ)    B(ウ)    C(オ)    D(カ)

E(ウ)    F(エ)    G(エ)    H(エ)

I(オ)    J(ア)    K(ウ)    L(ア)